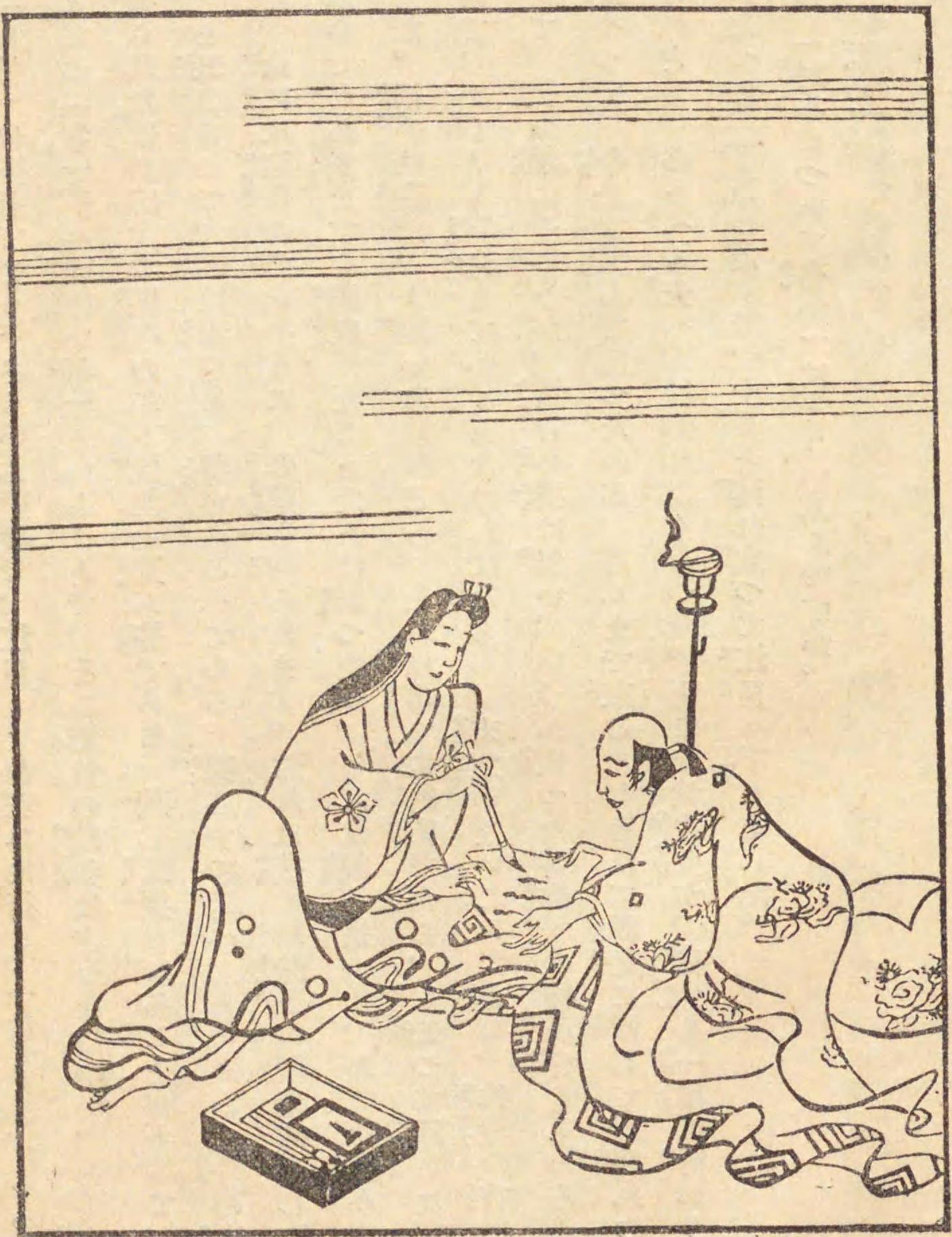


戸へ、よね狂ひにまいると申さても氣な、やつかな其かちまけはときく、身どもがふ
 られませねば、木屋町の御下屋敷をもらひます筈、又負ましたればと、顔の色青ふな
 して、聲をふるはす、隠さずとも申せ、別の事でも御座りませぬ、ふられましたれば、
 命にはかまひのなきやうに、作藏をさられます、御契約とかたる、よい戯氣ともひ、
 銀つかふて、慰にする見えたり、其相手はと、問ども申さぬかためといふ、一生の、
 一大事は也、よくく、観念して、未定めなき作藏なれば、かり首に、珠數を懸させ、
 跡に残して、誰にとらすべし、惜まらず共、日外とらしたる、緋綸子の、犢鼻褌か、せ
 と申せば、律義なやつて、唯今まで、いさみしが、涙をこぼす、さらばといへども、
 跡へも先へもゆかず、見るに笑しく、是は一興あり、同道して下らんと、常の風情に
 て、乗物こしらえさせ、十藏を召連て下りぬ、本町四丁目の店につきて、十藏宇兵衛
 を仕立、吉原へつかはしける、首尾こゝろもとなし、揚屋利右衛門に尋、京よりの添状
 つかはし、十藏を、宜敷大臣と申、むらさき様を頼むのよし申せば、内義四五日の中

を請合、日を定てかへる時、江戸になひめづらしひ物じやと、亭主に一包はづむ、宇
 兵衛が戻さまに、金の出しやうがはやひとしかれば、金ではなひ、此程京での仕出し、
 人の重寶に成物といふ、上書に古釋と記す、明てみれば、扇の要、目釘竹、針、きぬ
 の糸、餅粘、耳搔、うち齒枝、七色ありて、代三文、なんと、是は人のうれしがる物
 といふ、返事もせずあされて連てもどる、其後約束日參て、太夫様にあひて、酒おも
 しろうまはる時、十藏手をさして、むらさき様お一つまいれと、あらく押えて、襟か
 ら膝くだり打翻し、たんと、きのどくがる顔つき笑し、太夫くるしからぬと座を立て、
 行水とれとて湯殿に入、さいぜんの衣装付、少も替ず、肌は白綸子、中は紅鹿子の、
 ひつかへし、上は淺黄八丈の、八端懸、召かへられける、又上方女郎のせぬ事也、同
 し著物、揃て有し事、このもし、初ては、どれとても、寢道具も出ず、太夫寝ころび
 て十藏を呼て、しみくとかたり懸、
 硯取よせ、十藏様に身まかせ候、何か偽有べしと、下帯に端書して、

一八
むらさき筆と留てわたし侍る、終にかやうの事なし、宇兵衛不思議におもひ、宿に歸てかたる、世之介かさねて尋ければ、やうす見るにすこしたらぬ人を、賭にして遣しけると、さながら見えますによつて、先さまの人、憎さもにくし、あんな男に、あふてとらしましたといふ、世之介、横手をうつて、何をか隠すべし、京よりそればかりに、あれは下けると申、其跡色くくどきても逢ず、心にくき女是也

○木村 標題の「情のかけろく」といふのは、木屋町の下屋敷を貰ふか、作藏を切られるか、二ツに一ツの賭事といふところからつけたのでせう。乗懸を三條の橋に待たせて置いて、金を入れた財布はついであるか、今直ぐそこへ行くぞ、と小者に忙しく申しつけて、その間に世之介のところへ暇乞に來た。これは仕立屋の十藏といふ男で、俄に江戸へ下る。おつつけ又上つて参ります、といふので、世之介は不取敢餞別の金を遣つて、何の爲に江戸へ下るのか、と聞いて見た。されば吉原の小紫様に逢つて、振られないといふことを、自慢らしく云つたものだから、廿日鼠の宇兵衛といふ



者を「目付」は監督でせう。さういふ賭事で、江戸へよね狂ひに行く。「さても氣なやつかな」といふことでの「氣」は、「面白い氣」といふことで、その勝負の結果はどうなるのか、と聞くと、首尾よく振られなければ、木屋町のお下屋敷を貰ふ筈である。若し又振られることがあつて、負けたならば、と云ひさして、顔は青ざめ、聲がふるへてゐる。隠さずに云へ、といふと、外の事ではありませんが、命には別條の無いやうに、作藏を切られます。これは後に緋繪子の犢鼻褌をしめてゐる、といふのでわかります。馬鹿げたこととは思つたが、これは銀を遣つて、お前を慰みものにすると思つた。相手は誰だ、と聞いたけれども、それは申さぬ約束だから、と云つて話さない。一生の一大事で、よく／＼觀念してかゝらなければならぬ。未定めないことだから、作藏の首に數珠をかけさせて、後は誰にやらうが、惜む必要は無い、いつか遣つた緋繪子の犢鼻褌をしめると云つた。律義なやつで、今まで勇んで居つたのが、こゝまで來るとしをれて涙をこぼして、別れの言葉は交したけれども、あとへも先へも行かれなくなつた。そこで世之介が、自分も一緒に行かう、といふことになつて、不斷のなりで、十藏と連れ立つて江戸へ下りました。

○三田村 「財布はついて有か」はどういふんですか。

○木村 十藏の言葉でせう。

○三田村 前の話とは關係が無いんですね。

○林 無論さうです。十藏が江戸へ下る馬を待たせて置いて、世之介のところへ暇乞に來たので、全然別な話です。

○三田村 「一生の一大事は也」

○林 こゝから「かゝせと申せば」までが、世之介の言葉でせう。

○三田村 「かけろく」は懸賞のことで、祿を懸ける、といふ意味になる。「氣なやつかな」これも「氣なもの」といふ言葉があります。それから「作藏」は、「嬉遊笑覽」に説明がありますが、「二三用例を探して置きましたから、こゝへ加へて置きます。「鹿の巻筆」の五に、「なにやらのかぎにかゝりたるやうになまなかき男なれば名を作藏とつゝけたり」とあり、「寛潤平家物語」には「長瓢を黒ぬりにして作藏と書付」などとあります。

○林 もとは何ですかね。「氣な奴」は今いふトンキョウな奴といふのに當りませう。

○三田村 「緋繪子の犢鼻褌」——七歳で犢鼻褌をはじめて締める時、桃色の犢鼻褌をする。緋縮緬の犢鼻褌は、勇み肌の若い衆がやつてゐる。

○木村 漁師の茜木綿の犢鼻褌は御呪ひだと云ひますな。

○鶴岡 魚が寄つて来るといふんでせう。

○三田村 結局あれや裝飾だよ。

○林 禪は裸の遺風だからね。

○木村 本町四丁目の店といふのは、世之介の店なんでせう。こゝで十藏を大盡に仕立て、やつたが、どうも結果が心もとないので、世之介も吉原へ出かけて、利右衛門といふ揚屋へ行つて、京からの添書を見せて、よろしく頼んだ。利右衛門の女房が、四五日のうちには何とか首尾をしませう、といふので、日をきめて歸る時に、江戸にない珍しい物だ。と云つて亭主に一包をくれた。そこでその歸りに、金の出しやうが早いと云つて、——この「しかれば」は、たゞ早いぢやないか、と云つた位の程度でせう。いや、あれは金ではない、京で出来た、人の重寶になるものだ、といふ。見ると上書に「古釋」と書いてある。中には扇の要、目釘竹、針、絹糸、餅糊、耳搔、うち齒枝、といふ七色のものが入つてゐて、代金が三文、皆人のちよつと重寶するものである。面白だらう、と世之介がいふと、宇兵衛は返事もせず呆れてゐる。世之介の心持では、金を澤山くれるのは洒落てゐないから……………。

○林 これはさうぢやない、十藏がくれたんでせう。世之介は本町にゐて、宇兵衛が十藏を連れて行

つたんだから……………。



載所盡繪木岩紫小

○鈴木 松本 十藏でないと面白くありませんな。

○木村 さうですか。——愈々約束した日が来て、小紫に逢つて、酒宴に移つた時、十藏が手に持つた盃を小紫へさすのに、手荒くさしたものだから、そのついた酒がこぼれて、小紫の襟から膝のあたりへ

かゝつたので、太夫が變な顔をした。

○林 十藏がさういふ顔をしたんでせう。そこで太夫が「くるしからぬ」と云つた。

○木村 成程、それから湯殿へ入つて、今酒をこぼされた著物と寸分違はぬ著物を著替へて出て來た。かういふことは、上方女郎にはちよつと無いことである。はじめて逢ふ時には、どこでも寢道具を出さない。これは「高屏風くだ物語」などを見ましても、初會、二會は床に入らぬやうに書いてあります。但し京大阪では、そんなことは無いさうです。小紫は十藏を部屋へ呼んで、寢ころびながらしみぐと話をして、首尾をして、「十藏様に身まかせ候、何か偽有べし」と例の下帯の端に書いて、「むらさき筆」ととめて渡した。そんなことは無いことだから、宇兵衛も不思議に感じて、宿へ歸つてそのことを云ふと、世之介も又聞いた……。

○林 さうすると小紫が云ふのには、でせう。少し足りない人を、賭にして人がよこされたものと見たから、憎い仕業だと思つて、わざとあんな男に逢つてあげた。さういふ意氣張づくで逢つたのだ、といふ答だつた。

○木村 そこで世之介が横手を打つて、何を隠さう、そのことばかりの爲に、わざ／＼京から下つて來たのだ、と云つたが、その後はいくら口説いても、遂に逢はなかつた。まことに心にくいほどの

女である、といふのです。「ひつかへし」は「むさう」みたいなものですか。

○仙秀追記 「ひつかへし」といふのは、現在では著物の地質と同じものを、裾廻しに使用することださうです。紋服などその例です。

○松本 「淺黄八丈」といふのは、淺葱色の八丈でせうか。

○林 「八端懸」

○鈴木 「八端」は紹八反だけの目方があるから、さういふんださうですね。「淺黄八丈の八端懸」もやはりさうでせう。「十藏宇兵衛を仕立」は、今まで旅装束だつたのを、吉原行のなりにしたんだらうと思ふ。

○林 身分がらの支度をしたんですね。

○木村 身分以上でせう。

○松本 この重寶の品は本當にあつたんでせうか。

○林 さうでせう。この時分としては、皆重寶なものですよ。扇の要だつて、無ければ困る時がある。○樂堂追記 此頃より扇の要に鯨骨を用ゐることを仕出せる者あり。價廉にして而も効多きが故に、世上之を頗る重寶して流行せること諸書に見ゆ。

○木村 これは十藏の智慧ぢやなさうですね。

○三田村 「古釋」

○林 何かオチがついてゐるに相違無いのだが、どうもわからない。

○三田村 「淺黄八丈」はやつぱり色でせう。金のやりやうが早いといふこと、これは「色道大鑑」などにもありますが、いろ／＼格式が違ふので、こゝでは十藏を大盡に仕立てゝ行つたんだから、出しやうが早い、と云つて叱つたのです。寢道具を出さないのは、はじめての時は、泊つて来ないからです。この一章は延寶度の江戸で名高かつた小紫の禮讚なので、「吉原草摺引」に、「芝のくるまのつものほとりに今も昔のすたらずして、すり子木をはな紙にてにきられける」とあつて、

格子 いま 小むらさき

京町 三浦四郎左衛門

と出てゐる。これは元禄七年あたりの話のやうだけれども、その評判の中に、「昔の小紫」「今の小紫」といふわけで、小紫が二つ出てゐる。あとの方が今の小紫なので、「くるまのつものほ」といふのだから、芝の車町、牛町にゐたので、従つて廊にはゐない人であることがわかる。天和には高尾も小紫もゐなかつたといふことですから、こゝにいふ前の小紫は、延寶の小紫だらうと思ふのです。「上方女郎のせぬ事也」と云つてあるが、これは働いて書いたので、江戸に傳はつてゐる話によつて



吉原草摺引所載

書いたものぢやないかと思ふ。今の「吉原草摺引」の中にある話を、次に引用して置きませう。かういふ云ひ傳へがあつて、それによつて書いたとすれば、ものは新しいが、古い江戸の話を取入れたことになるのです。

格子

小紫

手のうらかへす
戀のいつわり

三浦四郎左衛門

紫のあげやにうばふ、此君勤の内に三井勘八といふ人、揚屋町清十郎にてあいそめける、小むらもさすがなみく／＼のものにあらず、見所あるにや、紫の色をかへす六度まで、ま

ことの床入をせず、既に七度になりし夜、勘八究竟の酒のみに五郎といへる底なし男をつれ、清十郎座敷にて大さけにして、こむらにも足のたゝぬまでのませける後、三杯しいつけて、くめんこかしのませんとしけるに、かぶろがいたわりて酒つぎけるを見かねて、勘八そのまゝかん鍋をおつとりて、こむらが髪ゆいめよりざつとあびせける、小むら騒がずして笑ひけるこそさすがなれ、濡れて座敷にたまられねば勝手へ立けるを、勘八はおそしと五郎をつかひして、勝手まです呼びにやりけるが、こむらも衣裳をとりかへ出けるを、五郎よきお姿や、つらき女郎やと、くだをまき、なへぢたになりて取附き、後よりゑもいわれぬこととして、又きる物をきかへさせけるもなをおかし、男共心得やがて、こむらを床へぞいれにける、此夜うちとけし情にあいけるよし

下略

○林「代三文」とある、これは一文、三文、五文といふのが、小賣物の安いものゝ標準値段だつたのです。——こんな賭をしたことは、實際あつたでせう。

一盃たらいて戀里

難波男、吳服物とゝのえにのぼりて、室町に有しが、それより後はと、世之介かたへ尋けるに、けふは東寺の御影供、いざと誘引ける、其日の亭主は、御出入申紙屋の吉介、五人前をこしらえ、畜生門の邊に、幕うたせて、誠に佛法の晝なり、人は入日のごとく、誰か一人も、世にとゞまるべしと、ほうれんさうのひたし物、椎茸などにて飲懸、ありがたひ咄ばかりして、いづれも酔て立さまに、世之介盃を、亭主にさして、おさめといふ、御意次第と戴て、一つ請る時、酒雫もなし、是てはさみが悪ひ、酒とつてこいと、又調に遣し、事新しくして、焼鹽にて飲出し、まんまと夢になりぬ、此まゝは歸らずか嶋原へをせく、尤と、八文字屋にゆきて、ある者千人でも、呼と申せど、紋日の事なれば、名所は一人もなし、おもはしからぬ、天神取集て、是ても埒はあかぬぞや、身共はともあれ、大阪のお客に、すこしの内も淋しき事のおかしから

ずと、太夫のうち、もらひ懸れ共ならず、喜右衛門北の御方出られて、大阪より、おのぼり遊しました、吉崎様と申太夫様、今日水揚にて、丸屋七左衛門方に、御出なされて御座りますが、唯今御内證、さかしました、是には様子ありて、もらひがなりそうに御座りますといふ、はじめより、もめる事なれば、それよかるといふ、聲のしたより、七左へ人橋懸て、御座るになつてきた、常の女郎狂ひと替り、水揚の定まり、太夫に引舟、天神二人添て、九日のつゞき、宿への進上、下へへの遣し物、奢第一の世之介が、肝煎程に、よろづ官活に申付て、紙に書て、まづよろこばしける、亭主袴肩衣、女房は著物あらため、置わたして、臺所に、大らうそく、明りを走る、八百屋、肴屋、いさみをなして、しきしやうの庖丁人、此威勢、一世の思ひ出也、懸る所へ、太夫様の、御座敷ごしらえに、まいるのよしにて、末の傾城四人まゐりて、衣桁に十二の袖を懸、こよる山をかさね、小蒲團錦の峯のごとし、床に懸物、書棚、香箱、文匣、煙草盆、其外手道具、時代蒔繪をひからせける、屢しありて、門口より、聲々

に申つぎ、太夫様御機嫌よく、是へ御出と申せば、ふたつ手燭を、先にたて、階の子静に、上せられ、上座の中程に、御なりあそばしける、左の方に、一家の女郎十一人、おくりまいらせて座する、右のかた、うしろより末座まで、かこゐの女郎十七人、皆緋むく著、並居る、御前に、引舟の女郎、禿、手つかえて座する、口鼻出て御引合申、めづらしき出合と、大阪にて見知ながら、申侍る時、嶋臺、金の大土器、祝言のごとく、銚子、くはえの、酒過て、色なをし風情ありて、太夫様を、宿への時服、庭錢まきちらす、禿やり手、御供の男ども、上を下へと返す、方々よりの進物、廊下に置つゞけて、帳付女、取つぎの女、ちいさい目からは、おどろくべし、相生の松風、小歌の聲ぞたのしむ

○三田村 この小みだしは何處かにある。一つお納めの盃が足らなかつた、それを小みだしに持つて來たのです。大阪男が呉服物を仕入に京へ行つた。室町は呉服店のあるところで、御無沙汰をいた



しましたと云つて、世之介のところへ来た。「御影供」は何日でしたかね。

○林 三月二十一日です。

○三田村 そこへ行かうと云つて、誘ひ合つて行つた。「亭主」は案内人です。五人前ほどの支度をし
て、「畜生門」は私は知りません。春のことでありますから、その邊に幕をかけて野遊をしてゐる。
それに引かけて「佛法の晝」と云つた。御影供へ出かける、「人は入日のごとく」と云つて、時刻を
現してゐる。この邊は鎖のやうになつてゐます。さういふ無常なところから、精進料理が出て、こ
れに似合しい、抹香臭い話ばかりしてゐたが、もう盃を納めさせるつもりで、納めたところが、酒
が一滴も無かつた。これでは氣持が悪い、といふので、酒を取つて來させて、又新に焼鹽で飲み出
した。さうして大分酔つた。酔つてみると、このまゝは歸れないといふので、嶋原へ行け、といふ
ことになる。一同揃つて八文字屋——これは當時大分はやつた女郎屋と見えます。嶋原を書いた古
いものにも、時折見える名前です。そこへ行つて、うちにゐる女どもを皆呼んで來い、といつたが、
紋日のことで——この「紋日」もいろ／＼な説がありますが、「物日」を訛つたのだと私は思ひます。
「色道大鑑」に「紋日、同物日の事なり」とある。「洞房語園」には「節句祝の日をいふ、紋日と云
ふ京言葉にて、吉原にては物日と云ふ」とありまして、實は同じ言葉なのを、妙な慣例になつて、

別なものゝやうになつてゐます。これは猶御説を伺ふとして、延寶九年の「嶋原紋日朱雀諸分鑑」に次のやうなものが見當りましたから、こゝへ引いて置きます。

紋日を人に尋らるゝ事

或田舎の人云、嶋原の詞に、もんびといふは何たる分ぞやといへり、答云、是をしらぬは野火なり、むかし六條に遊女のありし比は、遊女の身持きまゝにて、洛中洛外にもたやすく徘徊せしなり、さるゆへに舉屋の參會氣づまりな折は、春はさらなり、夏秋の比も祇園林など、所々のはなもみちのもとに、幕はりまはしあそびけるなり、ことに朔日節句など、よしある日にはなを出けるなり、其幕には女郎が轉々の定紋を付けてうちたれば、女童迄もあれば、たれじやとよく知り、誠に餘情に花麗な事なれば、女郎の出る日を紋日といひければ、今に至て分て敵州御げんの日をかくはいひならはし侍るなり。

紋日のことだから、賣盛つてゐる女は一人もゐない。「名所」といふのは「名所の松」といふ心で、太夫は「松の位」と云ひますから、さう云つたんだらうと思ひます。「天神」はその下の階級の女郎で、それもいゝやつは賣れてゐて面白くない。こゝの文章は、太夫がゐないから天神を集めた、といふ風にも取れます。ちよつと判断は出来ませんが、先づは太夫がゐないで思はしくないので、天

神を集めたと解した方がいゝかと思ふ。こゝも御説を伺ふことにします。太夫と思ふのに天神では面白くない。「淋しき事」といふのは、面白味が少いんでせう。何とかしなければいけない。これは世之介の言葉です。賣れてゐる太夫を貰ひに遣れるなら、と云ふので、



百女人品定所載

その算段をしたが、うまく行かない。「喜右衛門の北の方」ふざけたから「北の方」と云つたのです。それが出て、大阪から上つて来た吉崎といふ太夫が、今日水揚で丸屋へ行つてゐる。「水揚」は女郎がはじめて商賣に出る、第一日のことを云ふのです。水揚の第一のお客がきまつてゐて、

揚屋へ太夫が出て来るのだが、この時はお客が来なかつたのでせう。大阪から上つて来たといふのは變り種で、丁度大阪のお客だから、猶工合がいゝわけです。これなら貰ひが出来さうだといふの

で、それがよからう、と早速話がきまつた。「もめる」は物の入ること、「油地獄」の與兵衛の言葉にも「皆おれがもめじや」とあり、「色道大鑑」にも「もめる、金銀のさたなり、物をつかふ貌也」とある。入用を自分の懐から出すことで、散財といふのに丁度當ると思ひます。それは面白い、といふきほひだもんだから、人橋をかける。使をやることです。「御座るになつて来た」これは「御座るといふことになつて来た」といふので、もう少し委しく云へば、来るにきまつて其處へ来た、といふ意味です。省筆の妙を極めたものと云ふべきでせう。

○鈴木 水揚は一日ですか。

○三田村 幾日か買ひ續けるわけですが、とにかくその第一日、第一號のお客を云ふのです。

○木村 畜生門は東寺ですか。

○林 これは私もわからないので、二日ばかり考へたんですが、昨夜やつと考へついたのは、四足門の異名で、多分南大門だらうと思ふのです。京都の蛤御門なども異名で、彼處は火事の時だけあけるやうになつてゐる。火に遭つて口を開けるからの異名でせう。元祿以前の人の書いた紀行に、「錫門」といふのがあつて、これは回祿のたんびに小さくなつたからの異名だ、といふことが書いてあつて、京童の口の悪いことを云つてあります。こゝでもう一つ面白いのは、東寺の御縁日の時は、

中へ一切腥物を入れない。だからこの精進料理が利くのです。東寺は暮六ツで參詣人を追出しますが、北野の方には夜店がある。今でもその通りです。これも追出されたので、それから嶋原へ行つたんでせう。

○若樹追記 畜生門は考へ得たと思つて居ると豈計らん黒川道祐の遠碧軒隨筆に「東寺の東向に築地に穴門あり、畜生門と云、不律追放の僧を出す口、又死人をも出す、常は閉てあり」とあるのを見出してギヤフンの體です。考證家となる亦難い哉の嘆を發せざるを得ない。

○木村 それで「佛法の畫」が利くわけですね。

○林 今でも境内は廣いけれども、飲食店は入れないのです。「是ではきみがわるい」これは狂言の「素袍落」などにもあつて、古い言葉です。

○木村 「まんまと夢になりぬ」といふのは面白い。

○林 一寢入したんでせう。

○木村 「思はしからぬ」は上等でないのが残つてゐるんぢやありませんか。

○林 この水揚の方は、何かいさぎあつて來なくなつたんぢやないですか。外のものが行つてゐれば、貰ひがきく筈は無い。

○三田村 それは構ひません。お客が無ければ、貰ふといふことになると、そつくり持つて行つてしまふのです。だから女は仕合なわけで、この節の言葉で云へば、すべてダブつて来る。お客が同意しなければ、二重賣になるわけです。かういふ連中は名聞の爲にやるんですから……。

○木村 東京でも座敷をしまつて置け、などと約束すると、絶対に女郎の部屋へは他の客を入れない。それがまた女郎の名譽にもなる。

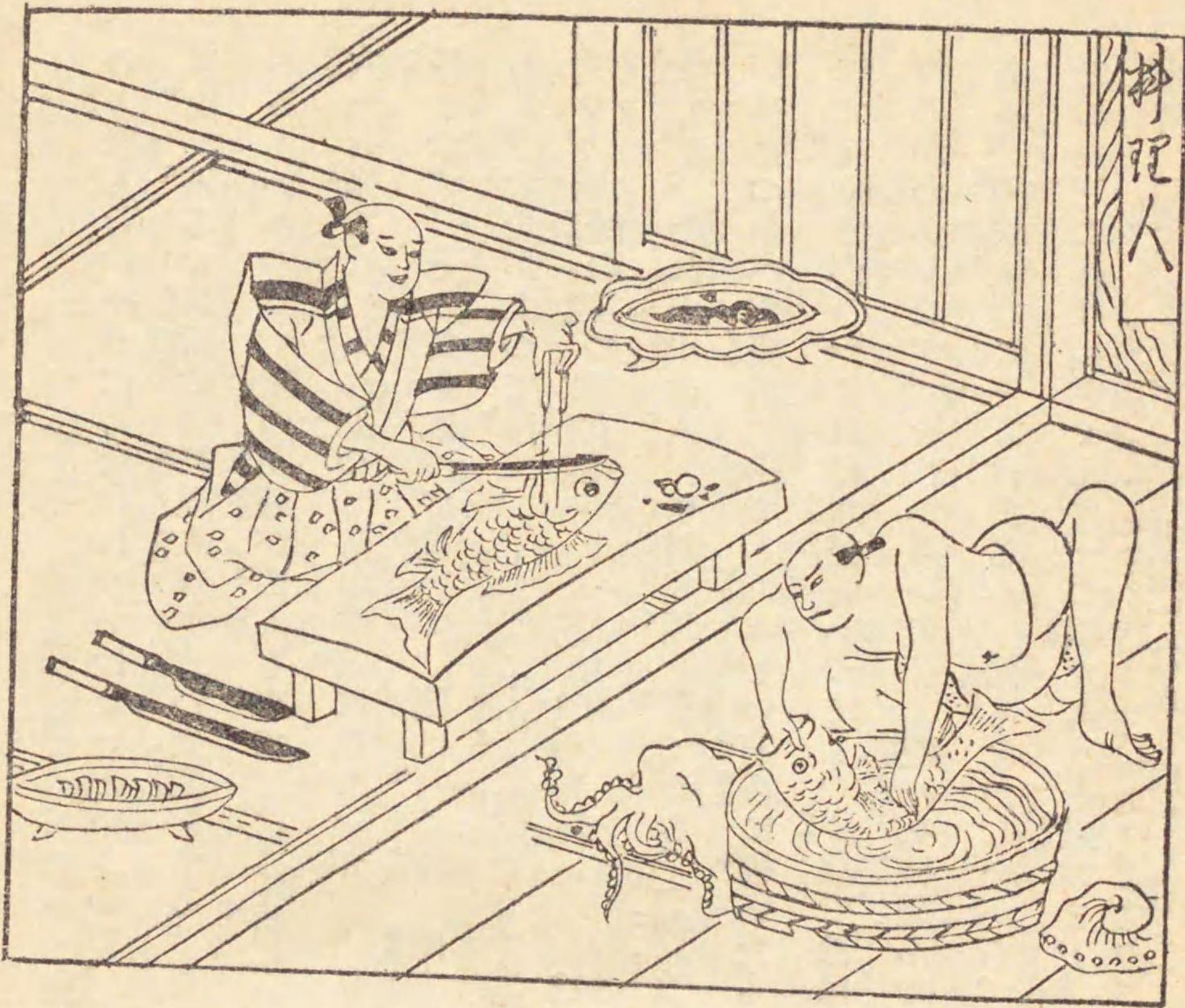
○三田村 お客もいゝお客でないとお出来ません。京都でも大盡はこんなことをやる。何しろ金を遣ふことがうれしい爲に、前に出たやうな禿の伊勢参をやらせる時代ですからね。……それから、常の女郎狂と違ふといふのは、水揚の場合だからで、その水揚のきまりといふものは、「太夫に引舟」引舟といふのは、いつも太夫についてゐる女で、太鼓女郎ともいふ。後の吉原では、振袖新造ともいひ、番頭新造、略して番新とも云つた。あれはこの系統を引いたものです。まあ太夫の祕書、若しくは副官みたいなものだ。ふだんはそれだけだが、今日は天神もついてゐる。

○林 引舟といふ名前が面白い。今ならバツテラだ。

○三田村 九日も續けて買ふので、宿や何かにもいろ／＼のものをくれる。かういふことにはすぐれてゐる世之介のことだから、萬事差圖を紙に書いて渡した。一同もその行届いたのを喜んだ。亭主

の方でもそのやうにしなければいけないといふので、袴肩衣といふやうな満艦飾で、女房ともく／＼に出て来る。臺所では料理人が本式の支度をする。まるで婚禮のやうな支度で、太夫の御座敷を拵へるといふので、末の女郎が四人も来て、こゝに書いてあるやうな飾りをする。「門口より聲々に申次」と来ては、呆れ返つてものが云はれないが、とにかくさういふ有様で「ふたつ手燭」は婚禮の通りです。その灯を取つて置いて、闇に行く時、兩方の灯を合せて一つ手燭にする、といふ儀式がある。太夫が上つて来て、「上座の申程に御なをりあそばしける」といふんだから大變だ。その左の方へ、吉崎の家の遊女達が十一人も来て、づらりと並ぶ。「かこゝ」は天神の次の遊女で、第三級の女です。それが十七人、皆緋無垢を著てゐる。「御前に」は恐入る外はないが、そこへ例の副官と禿が手をつかへて坐る。何でも仰々しい有様に書いたものです。茶屋の女房が出て引合をする。「大阪にて見知ながら」これは水揚といつても、京都でははじめての開業だが、大阪では已に開業してゐたのがわかります。それからいろ／＼祝物を持運んで来る。女どもの目からは、仰天するほど澤山ある。御祝儀のことではあるが、謠もをかしいから、小歌を持つて来て、「小歌の聲ぞたのしむ」と云つた。これは「ざゝんざ」の唄だらうと思ひます。

○木村 「明りを走る八百屋肴屋」なんか面白い書方ですな。「しきしやう」は？



人倫訓蒙圖彙所載

- 四〇
- 林 原本は假名で書いてある。
 - 三田村 「式正」でせう。式正の御膳なごころさ。
 - 林 「銚子くはえの酒過て」
 - 三田村 二度目のやつだ。
 - 林 「色直し」も云つて置いた方がよくはないかな。
 - 三田村 御召更でいゝでせう。「庭錢」は「色道大鑑」にあつた。
 - 鶴岡 「階の子」とありますね。
 - 林 これは前に出ました。
 - 木村 實際さう云つたんでせう。
 - 樂堂追記 「時代時繪」は東山時繪の事。「相生の松風、小歌の聲ぞた

のしむ」は「高砂」の祝言謡「相生の松風、颯々の聲ぞ楽しむ」のモジリ。

都のすがた人形

貨物取に、長崎へ下る人に、我も跡よりのおもひ立あるのよし、銀箱ささへ、預て遣し侍る、何か唐物、御望あそばし候と尋ければ、日本物を、買べきなげ銀と仰られける、さては、丸山の御遊山計の、御ころざしありや、まなく、あれにてまちたてまつるのよし、六月十四日、けふは都の詠のこす、月鉾のわたる時、我は玉鉾の商ひの道、いそぐとて先立ぬ、世之介は、おもふかぎりありとて、金銀洛中に蒔ちらし、社塔の建立、常灯をとほし、役者、子共に、家をとらし、馴染の女郎は、其身、自由にしておらせ、毎日遣ひ崩せども、まだ残る所の内藏、何にかすべし、さらば、此度長崎に下り、よろしき慰の有事もと、おもひ立日は八月十三日、いにしへ安部仲麿は、

古里の月を、おもひふかくは讀れしに、我はまた、あつちの月、思ひやりつると、淀
 の川舟、大坂の南の岸に著て、よき野郎の方に、二三日の壺入、こゝろのある亭主ぶ
 り、暇乞の床ばなる、時、金子五百兩、送られける、惣じて、役者子共の、世の暮し、
 けふあつて、明日は雪の柳のごとし、きれいにほどなくもとの木男となりぬ、或時は、
 鶏をすき、植木をすき、はや其家を賣、京に住、江戸より、大坂に宿を替、一生所も
 定ず、何の罪なき、銀もなきもの也と、兵四郎が笑はせて、舟ばたまでおくられ、風
 もこゝろして、時津海、浪をならさず、こゝろさす所の、大湊に著にけり、入口の櫻
 町を、見わたせば、はやおもしろうなつて來て、宿に足をもためず、すぐに丸山にゆ
 きて見るに、女郎屋の有様、聞及びしよりはまさりて、一軒に、八九十人も見せ懸姿、
 唐人はへだたりて、女郎替りけるとかや、戀慕ふかく、中々人の見る事も惜み、晝
 夜共に、其藥を吞ては、飽ず枕をかさね侍る、日本人のならぬ事は是也、紅毛は出嶋
 によふて戯れ、上方の町宿へも、自由に取よせ、豊なる事共こそあれ、京にて色川原、

色里にて一座せし人々、世之介下りを、めづらしく、女郎共に、能をさせて、御目に
 懸るのよし、庭に常舞臺ありて、囃しがた、地謠もとより、太夫、脇、番組して、定
 家、松風、三井寺、かれ是三番、しめやかに、物調子、一際ひくうして、なほやさし
 く又あるまじき遊興也、折節初紅葉の陰に、自在をあるし、金の大間鍋、もろこしの
 酒功讚を遷すとて、遊女三十五人もひくの出立、紅巾の、網前だれ、より金の玉
 だすき、あや楳のおもひ葉をかざし、岩井の水は千代ぞとて、亂れ遊びの大振舞、我
 京にて、三十五兩の鶴を、焼鳥にして、太夫の肴にせし事も、今此酒宴におどろき、
 風俗も替りて、しほらしと譽れば、都の女郎様がたの、風情が見たひといふ、それこ
 そわけ知の世之介様に、尋られといふ、幸このたび持せたる物有とて、長櫃十二さほ
 運ばせ、此中より太夫の衣装人形、京て十七人、江戸て八人、大坂て十九人、彼舞臺に名
 書てならべける、めいゝの仕出し、顔つき、腰つき、ひとりゝ替て、所によりて
 是は誰、それはどなた、いづれか、いやらしきはあらず、長崎中寄て、詠め暮しつ



○鶴岡 これはあとの方へ人形が出て来るので、かういふみだしをつけたものでせう。「貨物」は唐物のことですか。自分もあとから行くついでがあるかも知れない、といふので、長崎へ行く人に、銀箱を預けて先へ行かした。何か唐の物にお望があるのか、と聞いたところが、「日本物を買べきなげ銀」といふのは、どういふわけですか。

○木村 長崎行の人に銀を預けてやつたから、唐物でも買ふのか、と云つて聞いたら、さうではない。日本のもの、即ち女を買ふ下心があつての「投銀」は「捨銀」といふやうなことぢやありませんか。

○鶴岡 さては丸山の遊所で遊ばれる御志がおありになるか、向うへ行つて御待ちしよう、と云つた。六月十四日は祇園の御祭で、都を立つて行くのに残惜しい。祇園會の月鉾が御渡りになる時、「我は玉鉾の商ひの道」

○松本 道の枕詞ぢやありませんか。

○林 月鉾と玉鉾とを對にしたんでせう。

○鶴岡 その男は商賣の方を急ぐといふので、先へ立つた。世之介は考へるところがあると云つて、金銀を京都市中に蒔散して、塔を建てるとか、常燈明をあげるとかいふ金を、神社佛閣に奉納したり、役者子供に家を遣つたり、馴染の女郎には廢業させてやつたりした。かういふ風に、毎日金を遣つ

てゐるけれども、まだ残つてゐる澤山の内藏がある。かういふ藏はどうするであらう、あてにしな
いで旅立つてしまふ、といふんでせうか。長崎へ行つて慰みのこともある、といつて、八月十三日、
古へ安部仲麻呂が「古里の月をおもひ」といふのは、例の「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の
山に出でし月かも」です。「あつちの月」は長崎ですか。

○木村 支那ぢやありませんか。

○鈴木 もう少し軽く、長崎ぢやありませんか。

○鶴岡 淀の川舟で下つて、大阪の南の岸に著いた。「よき野郎」は懇意な野郎でせう。「壺入」は前
にもありました。この野郎のところへ滞在して……………。

○林 その野郎の心あるもてなしぶりに對して、別れる時に、五百兩遣つたんでせう。

○鶴岡 役者子供のご生活といふのは、雪の柳のやうなもので、明日になれば、ぢきもとの木男になつ
てしまふ。或時は雞を好いたり、植木を好いたりしてゐるかと思ふと、急にその家を賣つてしまつ
て、京に住んだり、江戸から大阪へ宿を替へたりして、一生どころも定まらない。「何の罪もなき、
銀もなきもの也」

○林 金もなければ罪もないものだ、といふんでせう。

○鶴岡 「兵四郎」といふのは何ですか。

○三田村 役者でせう。

○林 野郎を評した言葉ですね。

○鶴岡 さういふ野郎達に送られて、舟へ乗込むと、風も心して海も平かで、志すところの大湊に著
いた。

○鈴木 「まだ残る所の内藏……………」こゝの意味はどうなりますか。

○林 金に換へたんでせう。

○鈴木 「何かすべし」は俗語ですか。

○林 さうぢやない、あつたつて仕方が無い、です。

○三田村 「貨物取」はシロモノといふことです。貨物は一種の通語です。延寶七年の「長崎土産」な
んぞによりますと、「貨物になりてより長崎のさかへ」とか、「世に貨物といへるからの市法定りて
都鄙の商人をうるほす」とかあつて、取引の方法のことになつてゐる。寛文十二年に、長崎奉行の
牛込忠左衛門が、市法賣買の法を定めて、今まであつた、絲割符といふ專賣の商人をやめて、入札
方法によつて、船載品を諸國へ賣渡すやうにした。市法はその時から起つて、正徳あたりまで續い

ゐるのです。内蔵は外蔵に比していゝ藏でせう。

NIFFON NO COTŌBANI YŌ CONFESION,

Vo mōsu yōdai to mātā Confesor yori gōxensā cu me-
farūru tāmē nō canyōnāru giō giō nocōto dānguixā
no monpa no Fr. Diego Collado to yu xucqe Roma
ni voite cōre voxitātē mōno nāri. 1632.

MODVS CONFITENDI ET EXAMINANDI

Pœnitentem Iaponensem, formula suamet lingua Ia-
ponica. Auctore Fr. Didaco Collado Ord. Præd.
Romæ à die 20. Iunij, annī 1632.



ROMÆ.
Typis & impensis Sacr Congreg. de Propag. Fide.
MDCXXXII.
SUPERIORVM PERMISSV.

○木村 西鶴の「一目玉鉾」は長崎までの道中記です。先生自身長崎までは行つて

取り、預けておいて其上利をもとりまらする。例へば百匁を貸す時は、歸朝して百二十か二十五か三十かとりまらする。それを又金にか商ひごとにかけて兎角身が次第にとらうとの互の約束ぢや」

○林 「なげ銀」といふ言葉は後まであります。鎖國以前の、自由に貿易が出来た時代の言葉ぢやありませんか。コリヤードの著作で千六百卅二年 即寛永七年羅馬で出版された、羅馬字綴りの和文と羅匈對譯の懺悔録の中——七番のマンガメントに就ての條に、「扱又我等渡海せらるゝ衆に、その商の爲と萬事にも金を貸しまらする。しかれば損をせぬ爲にまツづその衆よりその貸しがねの質をこれにいよくその意義がわかります。

○三田村 「壺入」は前にもありましたが、「長崎土産」には「當所はむかしより揚屋はなくして轡に局入なれば」とあつて、局入をツポイリとよませてあります。前にもいらく御解釋がありました。○木村 今なら投資といふわけですね。



載所(板年九寶延)産土崎長

よりて」はわかりません。唐人は戀慕の情が深く、内證で晝夜共に變な薬を飲んで、枕を重ねてゐる。日本人の眞似の出来ないことは、これだけである。オランダ人は「出嶋」といふのは、地名だ

らうと思ひますが、委しく存じません。そこへ女を呼び、上方の町宿でも、自由に女を呼び寄せたりして、派手なことをやつてゐる。「京にて色川原、色里にて」といふのも、ちよつとわかりません。世之介が下つたのを珍しがつて、女郎どもに能をさせて、見せてやらうといふ。庭に常舞臺が設け

か。入口まで来ると、もう面白くなつて、宿に足をとぐめないで、すぐ丸山へ行つて見た。聞いたよりも一際まさつた有様で、一軒の女郎屋に八九十人もゐる、すばらしい勢であつた。「唐人はへだ

48 mo mixirana tocorôde finnín ni fôdocoite icarô to uo-moi marafuru.

Mata uarêga xôgui no iccai jôzu de uôgiaru ni fitô ga fore uo mairi ni qite tocacu uare ua fore uo damafu tame ni xoxin na mono gia to ii, fajime no futate ni, mo uazato maqete atta reba, forê de ano fito miga cane no tori tata ni ficarete, tçuini maqerarete, sono cane uo cûtto tóri tçucuxi maraxita. tçûgo va gojû to mata fanjû fan momme: fâchi jû fan momme de gozatta. fari nagara forêgaxi ga cârta còto ua damaite gozari, sono uie ano môno, finnín de, qenzocu uo yaxiô iô ga nai uo xitta niotte miga chiin uo tanôde sono cane uôba cacurete môdoxi maraxitê gozaru.

Sôno foca: miga xacu xen ua icai còto de gozarêba cai ta fito mo mâi nichi jefitô mo naxe to couarurêdomo, ichido ni mina uo nasu còto mo iezu, canôta bun mo naxi maraxenândê gozaru. Sari nagara ima confession no cãcûgo nota meni sôno xacu no cane uo mina totonoietê gozaru niotte qiô giû ni naxi maraxôzu.

Sãte mâta uarera tôcai xerarûru xû ni sôno aqinai notãme to banji ni mo cane uo cãxi marafuru. xicarêba son vo xenu tameni mãzzu: sôno xu iori sono caxi gãne no xichi uo rôri ázzuqête uoite: sono uie ri uo mo tóri marasûru. rato iêba fiacu me uo casu tòqi ua qichô xite fiacu ni jû ca ni jû go ca, fanjû ca tori marafuru. fore mo mata cane ni ca aqinai goto ni caqete ca toqaqu miga xfdai ni toro to no tagai no iacufocu gia. go co cu uo maquji bun ni mo, aruia cane aruiua sono maqidane uo casu ua tocacu migui môxita gotoqu caru jibun ni ni fan jûfôdo ribai ni tòru fãiaru fazu gia ni, uare mo còno rocû nen no aida ni fo tóri maraxita. mottomo consciencia ni cacatta rêdomo fãiaru tocorôde fito nami ni itaxi maraxita.

Vatacuxi aru dai miô no daiquan to xite sôno go chiguiô uo faiban itaxi marafuru. só gozarêba sono iacu ni tçuite no nagueqi ua uouoxi, tocugui ua fucuno gozaru niotte uãga qenzocu uo sodatçuru tamení, nûxi no iuruxi nô quanbun ni tori maraxita. icutabi to ua uoboie maraxenu. tairi acu xichi fachi do de gozaru.

Mata úchi no mono domo no chinga tòqi doqi amari fucunãi

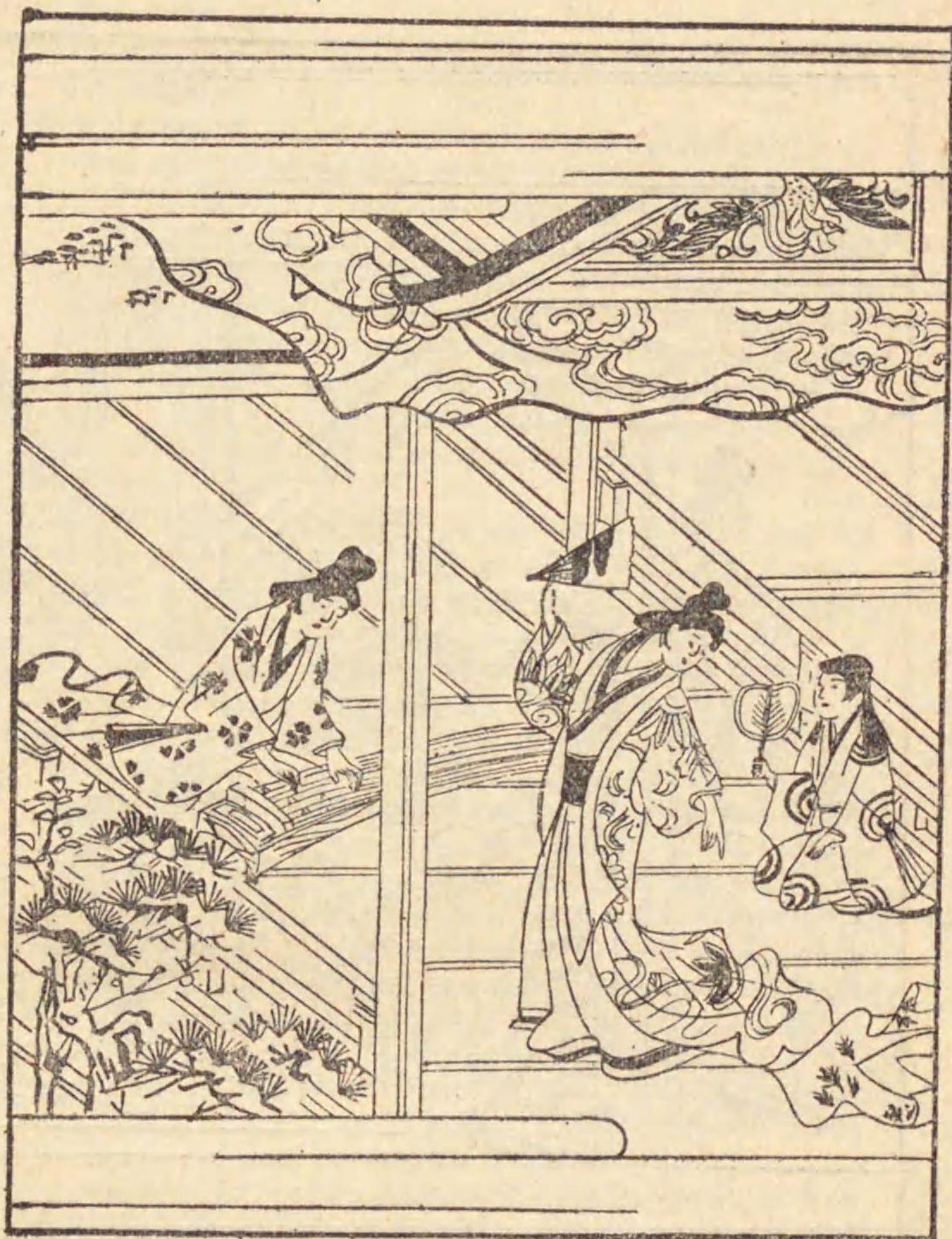
○林 財寶の藏です。貨物取は宰領ぢやありませんか。貨物の宰領で、手代みたいな、大番頭が行くんぢやないですか。

○三田村 引取に行くんでせう。

○林 どうも私は商人そのものぢやないやうに思ふ。

○鶴岡 いや〜長崎へ著いて、櫻町といふのが、今でもあるかどうかです

五〇



載所（板年九寶延）産土崎長

の酒功讚」は故事がありません。三十五人の遊女が思ひく〜のいでたちをして——この邊は一向わ
かりません。「岩井の水は千代ぞとて」は、何か引用の文句でせう。さうやつて大振舞をした。自分

てあつて、囃子方や地謡
は固より、太夫も脇も女
で、定家、松風、三井寺
といふ、三番の能をやつ
た。その調子が一際低く
て、一層やさしく見えた。
二度とやることの出来な
い遊びである。折ふし秋
のことですから、紅葉が
色づいて来る。その陰に
自在をおろして、金の大
燗鍋をかけて、「もろこし

は京にゐる時、三十五兩の鶉を焼鳥にして——随分鶉としては高いやうですが——太夫の肴にした
ことがある。今この酒宴に當つて、風俗が變つてゐるので、しをらしいと云つて褒めたところが、
都の女郎様方の風俗が見たい、と云つたものがある。それはさういふことの明るい世之介様に聞い
たらわかるだらう、といつて聞くと、幸ひ今度持つて来たものがある、といふので、長櫃を十二棹
運ばせた。それをあけて見ると、皆太夫の衣裳人形で、その時分有名な生人形でせう。京都の太夫
が十七人、江戸のが八人、大阪のが十九人、これだけの生人形を、前に能をやりました舞臺へ並べ
まして、それに一々名前を書いて人に見せた。顔つきといひ、腰つきといひ、一人々々姿が變つて
ゐて、これは誰、あれは誰といふことがわかる。長崎中のものが特にこれを見に来たが、「いづれか
いやらしきはあらず」といふので、どの人形も氣に入らないのは無かつた、といふのでせう。大分
わからないところがありますから、どうか御説明を願ひます。

○木村 櫻町は丸山の町名ですかね。

○鈴木追記 櫻町は市中で世之介の泊つた宿屋の有つた處でせう。丸山町は其所から川の四つも越し
た先です。出嶋は出嶋町と云つて阿蘭陀屋敷が有つて、市中とは離れて、橋一つ越した埋立地です。
唐人屋敷とは全然別で、オランダ人のみの居留地でありました。

○三田村 「唐人はへだりて」といふのは唐人口と日本人口とに分れてゐるからです。「戀慕ふかく中々人の見る事も惜み……」こゝで唐人といふのは、すべて外國人の意味ですが、當時の人は外國人を大變淫縱なものに見てゐる。「其藥を吞て」これは南方先生の畠だけれども、ひどく信ぜられてゐたものと見えて、長命丸などといふのも舶來品です。外國人が淫縱であるといふ證據は「好色由來揃」に「ことにつらきは唐むきの女郎、色あほくとして常に地黄丸をたやさすとかや」とあり、「五箇の津餘情男」にも「肥前國彼木郡長崎の津こそ誠や唐土日のもとの大湊、萬里の海路をへて唐土船春の中つ比は入津、暹羅東埔塞咬啗吧などいふ外國の奥舟は秋の初つかた來朝す、此津の繁昌中々たとふるに言葉なし、常に美食にふけり姪酒に暮す」とある。これだけ淫縱である彼等が、その藥を飲むのは有名な話で、これを書いたのは、西鶴は早い方ですが、後のものにもある。「野傾旅葛籠」の中には、「都の世智かしこき藥屋の手代か此唐人をふつくり奇妙の藥方を聞くに、唐にも入は金にして只は傳ゆる事の成らぬ様子を仕て見すれば、袖の下より二三角握らせ、近年上方にて流行る長命丸に増りたる房中の藥を尋ねしに、是は祕して傳へず、調合せしを一包小判一兩つゝにして竊に賣りぬれば、聞傳に買人多く逆もの事に慰みがてら女郎共を呼て此唐人をかけて其強き所を見るへし……」といふやうなことが書いてある。寛政五年板の「神稻水滸傳」の中

も、ひどい話を書いてあるが、これは引用を見合せませう。とにかくそんな風に、ひどく見られたものであることは慥かです。オランダ人は出嶋のカピタン屋敷へ連込む。「上方の町宿」はわからない。

○林 私もわからないが、これは日本人の方だらうと思ふ。町宿へも遊女が來られる、檢束のひどくなかつたことを云つたものぢやないですか。それから唐人口は日本人口より一段下つたものぢやないですか。この時分は唐人屋敷がまだ出來てゐない、市中に存在してゐた頃で、あれが出來たのは、元祿何年かです。「上方の町宿」は廓から自由に遊女が來たんだらうと思ふ。

○鶴岡 長崎は上方と交渉が多かつたから、上方人の泊る宿がずつとあつたんでせう。

○三田村 京の色川原は四條でせうね。

○林 男色と女色と相對して云つたんでせう。宮川町あたりのことを指したので……。

○三田村 能舞臺のあつたことは、「長崎土産」を見ますと、「美濃屋五郎右衛門第一の大家にて……舞臺にはいつもせんだく物をほし」又「博多屋理右衛門……あないさせておくに通るに一段小高き中二階有中に五六間方の舞臺を敷」などとある。中二階が見るところになつてゐて、眞中が舞臺になつてゐるらしい。これは女能で、「長崎土産」の中には、女には不似合で、殺風景だから

よさしたい、といふやうなことが書いてあります。
○鶴岡 それで「一際ひくうして」と云つたんですね。



衣裳人形

○林 この定家、松風、三井寺の三番は、皆かつらもの即女物です。

○三田村 「酒功讚」は三十六歌仙みいたいもので、武將を組合せたものがあつたと思ふのですが、どうも思ひ出せない。

○林 酒仙を集めたものですか。

○三田村 眞面目なものだつたと思ひます。上に讚が書いてある、それをうつしたわけです。「紅半の網前だれ」は、華魁の道中の時なんか、帯をかう前へやつて、絲の網をかける、あれぢやない

ですか。「より金」は金モールだ。

○木村 「あや櫛」といふのは入といふやうな形になるんぢやありませんか。杉なりがあやになるので「あや櫛」ぢやないか。「おもひ葉」は前にも出たが、こゝはよくわからない。何か持物ですか、頭へさすのでせうか。

○三田村 「岩井の水は千代ぞとて」は祝言にある。

○林 衣裳人形は、きまつて四足のついた臺に載つてゐて、人形は木彫の上にゴフンを塗り、衣裳もキメコミでなしに著せたものです。

○木村 今でも人形の一部類に衣裳人形といふのがあります。

○鶴岡 坐つてゐるんですか。

○林 立つてゐるので、等身大といふやうな、さう大きなものは見ない。

○木村 こゝは大に豪華なところを見せたんですね。

○樂堂追記 「岩井の水は千代ぞとて」は、謡曲「養老」の祝言小謡に「千代のためしを松蔭の、岩井の水は薬にて」とあり。

床の責道具

合貳萬五千貫目、母親より、ずいぶん遣へと、譲られける、明暮たはけを盡し、それから今まで、二十七年になりぬ、まことに、廣き世界の遊女町、残らず詠めぐりて、身はいつとなく、戀にやつれ、ふつと浮世に、今といふ今、こゝろのこらず、親はなし、子はなし、定る妻女もなし、情念見るに、いつまで、色道の、中有に迷ひ、火宅の内の、やけとまる事をしらず、すてにはや、くる年は、本卦にかへる、ほどふりて、足弱車の音も、耳にうとく、桑の木杖なくては、たよりなく、次第に、笑しうなる物かな、おれ計にもあらず、見及びし女の、かしらに霜を戴き、額にはせはしき、浪のうちよせ、心腹の立ぬ日もなし、傘さし懸て、肩くまにのせたる卿も、はや男の氣に入、世帯姿となりぬ、うつれば替つた事も、何か此うへには有べし、今まで願へる種もなく、死だら鬼が喰ふまでと、俄にひるがへしても、有難き道には入難し、あ

さまざま身の行末、是から何になりとも、成べしと、ありつる寶を投捨、残りし金子、六千兩、東山の奥ふかく、掘埋めて、其上に、宇治石を置いて、朝顔のつるをははせて、かの石に、一首きり付て讀り、夕日影、朝顔の咲、其下に、六千兩の、光残して、と、欲のふかき、世の人にかたられけれ共、所はどことも、しれ難し、それより世之介は、ひとつこゝろの友を、七人誘引あはせ、難波江の小嶋にて、新しき舟つくらせて、好色丸と名を記し、緋縮緬の吹貫、是はむかしの太夫、吉野が名残の脚布也、幔幕は過にし女郎より、念記の著物をぬい繼せて、懸ならべ、床敷のうちには、太夫品定のこしばり、大綱に、女の髪すちをよりませ、さて臺所には、生舟に鯨をはなち、牛房、薯蓣、卵をいけさせ、檣床の下には、地黄丸五十壺、女喜丹貳十箱りんの玉三百五十、阿蘭陀糸七千すぢ、生海鼠輪六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の姿八百、枕繪貳百札、伊勢物がたり貳百部、犢鼻禪百筋、のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと、丁子の油を貳百樽、山椒薬を四百袋、ゑのこづちの根を千本、水銀、綿實、唐がらし

の粉、牛膝百斤、其外色く、品くくの、責道具をとゝのえ、さて又、男のたしなみ
 衣装、産衣も敷をこしらえ、これぞ二度、都へ歸るべくもしがたし、いざ途首の酒
 よと申せば、六人の者おどろき、爰へもどらぬとは、何國へ、御供申上る事ぞといふ、
 されば浮世の、遊君、白拍子、戯女、見のこせし事もなし、我をはじめて、此男共、
 こゝろに懸る、山もなければ、是より女護の嶋にわたりて、抓どりの女を見せんとい
 へば、いづれも歡び、譬ば、腎虚して、その土と成べき事、たましく、一代男に生
 れての、それこそ願ひの道なれと、戀風にまかせ、伊豆の國より、日和見すまし、天
 和二年、神無月の末に、行方しれず成にけり

○間「床の責道具」はあとに出て参ります。合せて貳萬五千貫目の銀を、随分つかへといつて、母親
 から譲られた。明暮馬鹿をしつくして、譲られてから二十七年目になる。廣い日本中の遊女町を眺



好色一代男



神詣りの稚児（慶長年間俗繪屏風縮圖）鉤庭雜考所載

○仙秀追記 「傘さしかけて肩車にのせたる娘も」は、席上では神詣りの時の風俗だらうと申しましたが、或ひは小町踊の往返のことをいつたのかも知れません。いづれにしても女兒の幼少の時を言ひ現はしたのです。（挿圖参照）



小町踊をかけたりの圖（鉤庭雜考所載）

○木村 これは神參の姿で、それで傘をさしかけた、と云つたんでせう。
清涼寺融通念佛緣起（應永廿一年）
う男の氣に入るやうな、世帯姿になつてゐる。



鉤庭雜考所載

○林 容體でせう。
○間 自分ばかりではない、見及びし遊女——晴を飾つた女どもも、頭は白くなり、額もせゝこましく皺が寄つて、腹の立たぬ日も無い。その昔小さな子供で、傘をさしかけて肩車に乗せた娘も、も

○林 老人のつく杖です。桑の木は薬用にもしたものです。
○間 「次第に笑しうなる物かな」は自分の容色がですか。
め廻つて、自分はいつとなく戀にやつれ、今といふ今、浮世のことは何も心に残らない。親も無ければ、妻子も何も無い。つらく思ふに、いつまでも色道の中有に迷つて居つて、「火宅の内」は中有に對して云つたものでせう。火宅の中に焼けることを知らないで、もう來年は六十一になるわけである。年を取つて足弱になるといふこと、「足弱車」と兩方にかけてのでせう。その音も耳にうとく、「桑の木の杖」
六二

○間 自分がやつたことではないんですね。もうこの上、遷り變ることもあるまい。今まで別に信心することもなく、死んだら鬼が食ふまでのことだと思つてゐる。この考は世之介式なので、今更翻



女中風俗艶鏡 (祐信畫) 享保七十年板

つて佛道にも入れない。これから何とでもなれ、といふので、金六千兩を東山の奥深く埋めて、その上に宇治から出る石を置き、朝顔の蔓を匍はせて、かういふ下らない歌を彫りつけて置いた。慾の深い人達は搜したけれども、それが何處とも知れにくい。

○林 この「ずいぶん」はムヤミニ

ですか、イタハツテですか。

○間 思ふ存分、ぢやありませんか。

○三田村 現在の意味ではさうだが、こゝは「程に應じて」だらう。

○林 大事に遣へ、でせう。浪費しろ、と云つたわけぢやない。これで見ると、二十三の時に譲られたんだね。

○三田村 貳萬五千貫を、一兩五十八匁として換算してみたら、いくらになるか。それが六十兩とどういふことになるか、あとで計算して見ませう。それからこの「夕日影朝顔の咲其下に六千兩の光残して」といふのは、柳田さんの方の領分だが、例の歌がある。

○林 「朝日さし夕日かゞやく其下に黄金萬杯漆千杯」ですか。あれは古墳についてゐる俗謡で、坪井正五郎先生は、塚を築く時に、木遣唄のやうにうたつた唄の残りものであらうと云つて居られました。

○鶴岡 死んだ人が大きな身代だつたことを讃へる言葉なんではせう。

○林 それをもじつたんですね。かういふ思想の流が後まである。

○木村 此間も京橋の弓町で、先祖が金を埋めて置いたといふので、土を掘つた話がありましたね。金を壺へ入れるといふことがあるので、かういふ傳説を有力ならしめるらしい。去年の銀行取付の時も、大阪では壺が賣切れてしまつた、といふ風説がりました。「一首きり付て」石だけは「切りつける」と云ひますね。

○鶴岡 刀の銘もキリツケルですね。

○三田村 彫と刻と二つあるわけだ。

○樂堂追記 「せはしき浪の打寄せ、心腹の立たぬ日もなし」は、謡曲「江口」に「隨縁真如の波の立



好色訓蒙圖彙所載

たぬ日もなし」とありて、「古事談」の文句より出づ。

○間 それから世之介は、自分と同じやうな心持の友達を七人誘ひ合せて、難波江の小さい嶋で、新しい舟をつくらせて、好色丸といふ名は、艦へ書いたのでせう。旗の代りに緋縮緬の吹貫、これは昔の吉野大夫の脚布である。舟の中に張る幔幕は、今まで馴れ馴染んだ女郎の記念の著物を縫ひ繼がせて拵へた。床敷の中は腰張をしなければならぬので、それは太夫の品定で貼る。「大綱に女の髪すぢをよりませ」は、例の「徒然草」の「女の髪筋をよれる綱には大象もよく繋かれ

……といふのを持つて來たんでせう。大きな舟で、臺所の生舟には、鱒を放ち、牛蒡、薯蕷、卵をいけさせて置く。精力をつける道具です。地黄丸、女喜丹、この邊のところは、催淫劑だらうと思ひますが、よくわかりません。

○三田村 そこいらは、叱られるといけないから、説明しないことにしよう。

○間 「伊勢物がたり貳百部」はやはりあゝいふ好色物語だからでせう。「丁字の油」は何ですか。

○林 外科用でせう。

○間 それから男のたしなみとしての著物、女護鳴へ行つて子供が生れるかも知れない、といふので、産著も澤山拵へた。「これぞ二度、都へ歸るべくもしがたし、いざ途首の酒よ」といふのは世之介の言葉です。「六人の者おどろき」とあるが、前には「ころの友を七人」となつてゐますね。世之介を入れて七人なのでせうか。

○三田村 さう解釋しなくつちや、こゝがおつゝかない。

○間 皆が驚いて、何處へ行くのか、といふ。世之介は、もうこの世の中の遊君は、残るところなく見盡したから、もう吾々の心にかゝるものも無い。これから一つ女護鳴へ渡つて、つかみ取の女を見せやらう、と云つたので、いづれも喜び勇んで、假令腎虚して死んでしまつても、一代男とい

はれるほどの者にとつては、それが願の道である、と云ひまして、戀風にまかせて、日和を見て、天和二年の十月末に、伊豆の國から出帆して、行方知れずになつてしまひました。——これは私の説ではないのですが、山口先生は、この工合が「源氏物語」の「雲隱」の巻の面影があるやうに云はれて居ります。

○三田村 そこいらは寧ろ筆拍子、筆まかせで、そんなに忠實にやつたものかどうか、疑問ですね。

○木村 かう書かないと、世之介の棄て場に困るでせう。

○三田村 「のべ鼻紙九百丸」この「丸」は、目方取引をする荷物を「丸」といふ。一丸が五十斤で、百六十目一斤とすれば、八貫目になるわけです。

○林 シメが四つで一丸ですね。

○三田村 砂糖や絲もこれを使ふ。絲割符から來てゐるのです。

○林 こゝに擧げてある藥や道具は、大概わかるけれども、「阿蘭陀絲」といふのが、どうしてもわからない。イノコヅチは墮胎劑ですね。「和漢三才圖會」には、墮胎法まで書いてある。「好色訓蒙圖彙」の人倫の部に、「奥様、諸てい恭(不明)艶におほとかにして錦帳のうちに深居給ふゆへにおくさまといふなり、しかあるを殿のわきごゝろつまみぐひし給ふかとさかしらする目代をつけをき、

おてかをにくみ茶扈從をさいなみ給ひ、もし殿様のわき道に胤をおろし給へば、うはべにはおよろこびのゑ顔して、あのゝ物のとしてちよろりと壹服させ、ゑのこづちのね、水銀わた實牛膝唐がらしなどをたしなみ給ふは是さんぐの事」云々とあります。これで大體こゝに出てゐるものゝ效用がわかる。エノコヅチの根といふのは、牛膝の根で墮胎用具に使ふのです。

○木村 延喜式にも、山城國年料雜藥三十二種之内、牛膝、苦參、各二十五斤とあります。

○林 「山椒藥を四百袋」がわからない。

○三田村 塗布劑でせう。

○林 「こゝろに懸る山もなければ」といふのは、元來は月の出かなんかのことで、それが轉じていろいろな場合に用ゐられてゐるんでせう。

○木村 大阪で舟を拵へて、伊豆から舟出をしてゐますな。

○林 従つて八丈嶋を目ざして行くわけになる。

○仙秀追記 牛膝は婦人用藥なることは、津輕爲信(弘前藩祖)と共に京都で切支丹の洗禮をうけた、その長男信建の手翰にこんなのがあります。「追而申入候女房共血膾相煩迷惑に存候、月水も二三月滯申候、牛膝散などにては成不申得は意庵に御談合被成藥方□□□忝無存候……」宛名は西

洞院様としてあります。

二柱のはしめは鏡臺の塗下地とおぼえ稻負鳥ハ羽のなひ牛の事かと吾すむ里は津國櫻塚の人にたつねても空耳潰して天に指さし地に土け放れず臂をまけて桔槔の水より外をしらずひろき叵波の海に手はとゞけ其人の古々路は斟かたくてくます或時鶴翁の許に行て穉の夜の樂寐月にはさかしても余所耳は濟ぬむかしの文枕とかいやり捨られし中に轉合書のあるを取集て荒猿にうつして稻臼を挽藁口鼻耳讀てさかせ侍るに婁謗田より闕あがり大笑ひ止す鋏をかたけて手放つそかし

落月菴西吟

○鈴木 どうもこの跋の文章はわかりません。二柱は伊邪那岐伊邪那美の命のことですが、「鏡臺の塗下地」は何ですか。

○木村 二柱の見立てせう。

○鈴木 「稻負鳥」は古今三鳥の一です。

○三田村 あれは馬だといふ説があるだらう。

○林 「津の國櫻塚」は？

○三田村 この筆者、水田西吟のゐどころでせう。

○林 とにかくこれはとつ違へたことを云つたんぢやないか。「稻負鳥」を馬といふのに對して……。

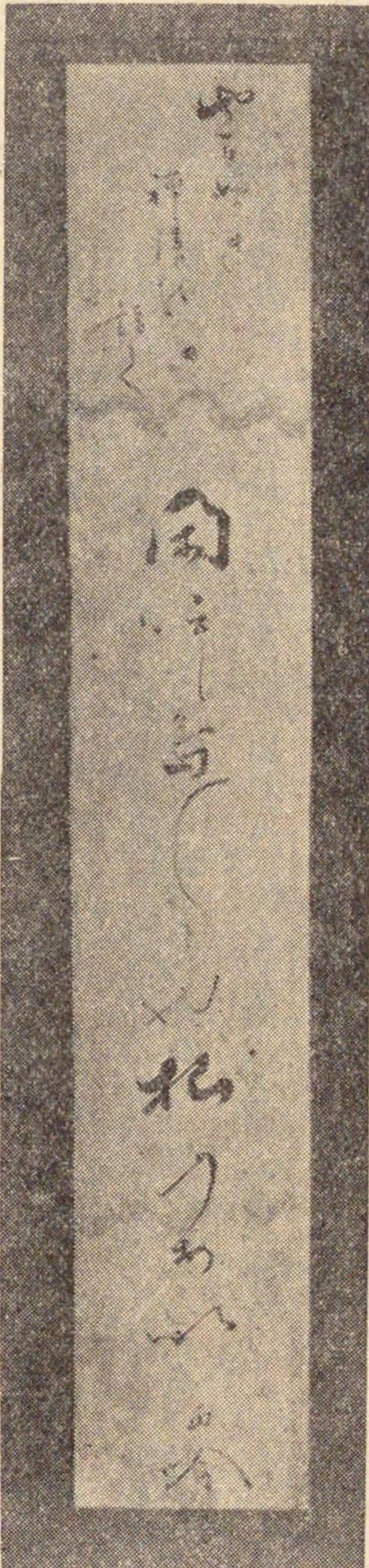
○木村 「臂をまげて」は「飲水曲肱爲枕樂亦在其中」で論語にある。桔槔が出たから、「こゝろは塗かたくてくます」といつた。

○林 とにかく西鶴のところ、いろくいたづら書があつたのを、集めてうつして、臼を挽く藁鼻に讀んで聞かせたら、手に持つた鋏を抛り出して大笑をした、といふんでせう。

○三田村 「婁謗田」は河内だが、其角の句にあつたらう。

○柴田 「うすらひやわつかに咲ける芹の花」といふ句のところ、「河州八尾姫をしり」といふ註が

あります。



西吟筆蹟

昭和三年六月廿五日印刷
昭和三年六月廿八日發行

【輪講好色一代男卷八】
(定價金七拾錢)

著作者 三田村玄龍

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地

發行者 和田利彦

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷者 川村清次郎

東京市京橋區木挽町三丁目十二番地

印刷所 川安印刷所



發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番
(電話東京橋六五二番)
(振替口座東京一六一七番)

春陽堂

三田村鳶魚氏著作集

國ばら然。だきべるさ述記てじと心中を活生民國は史歴
 どほ山で込氣意のと。るあが要必るへ替書に新く悉は史
 著名の來近皆。物たね列き書く白面で致筆の例を料資の
 。む薦てしと

鳶魚隨筆

定價金貳圓七拾錢
 送料拾九錢

鳶魚劇談

定價金貳圓八拾錢
 送料拾八錢

江戸の芝と上野淺草

定價金參圓
 送料拾八錢

江戸の噂

定價金貳圓九拾錢
 送料拾八錢

瓦版のはやり唄

定價金貳圓五拾錢
 送料拾八錢

江戸年中行事

定價金參圓六拾錢
 送料拾八錢

三田村鳶魚編
 輪講道中膝栗毛

定價
 上編金參圓五拾錢
 中編金參圓貳拾錢
 下編金參圓貳拾錢

